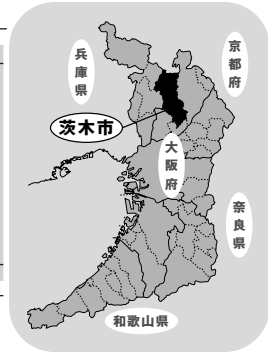
わたしのまちのPR（ピーアール）

茨木市編



茨木市は、淀川右岸の大阪府北部に位置しており、市域の北半分は丹波高原の老の坂山地の麓で豊かな緑に包まれ、南半分は大阪平野の一部を形成する三島平野が広がり市街地が形成されています。

古くは西国街道や亀岡街道、現在は高速道路や幹線道路などが交差する交通の要衝として発展しています。

また、大阪市内（新大阪）まで電車で約10分とアクセスも良いことから、人口は増加傾向となっています。

この茨木市の特徴や強みといった事について、企画財政部企画調整課長の小林さんにお話をお聞きしてきました。

本日はどうぞよろしくお願いします。

早速ですが、茨木市の歴史について教えていただけますか。

よろしくお願いします。

まず、本市市名の由来からお話します。諸説あるようですが、市域にイバラの木が多く茂っていたことから、イバラを切って田畑を開拓し、集落を作ったということから茨切（いばらきり）がなまって茨木になったという説などがありますが、定説はありません。

イバラの木や茨切が由来ですので、イバラギシではなく“イバラキシ”と読むことが正解です。

本市域には古くから人が暮らしていたようです。

南茨木駅の東側に、弥生時代の大規模環濠集落遺跡**東奈良遺跡**があります。ここは、環濠の内部に多数の住居や柱穴などの跡があり、外側には墓域もあります。さらに、銅鐸や銅戈・勾玉の鋳型など鋳造に関する遺物が出土しています。このうち、第二号銅鐸鋳型で生産された銅鐸が近畿だけでなく四国でも発見されており、弥生時代の日本の数多くのムラの中でも、金属を扱うことのできるムラとして、重要な位置を占めていたと考えられています。

この付近は「沢良宜（さわらぎ）」と呼ばれ、「佐和良義（さわらぎ）神社」には迦具土（かぐつち）神が祀られています。カグは銅の古語であり、サワラギもサワラ（銅器）ギ（邑）となることから、この一帯が銅製品の加工と関係が深いところであったことがうかがえます。

銅鐸の鋳型

また、本市は国内でも有数の古墳群地帯であり、古墳時代初期から末期までの各時代の古墳が点在しています。

その中でも、**太田茶臼山古墳（継体天皇陵）**は、墳長226ｍの前方後円墳で、宮内庁では継体天皇の三島藍野陵（みしまのあいのみささぎ）に定めていますが、その真偽については異論が多くなっています。

この他には、本市と高槻市の境にある阿武山にある**阿武山古墳**（あぶやま）は、「貴人の墓」という別名でも知られ、被葬者は藤原鎌足との説があることから、高貴な人物の古墳であることは間違いありません。

ここは通常の古墳にあるような盛り土はなく、浅

い溝で直径約80ｍ（南北82ｍ　東西86ｍ）の溝が半地下の石室を中心にめぐっています。石室の内部には棺台があり、その上に、漆を接着剤とした布を何層にも固めて作られ、外側を黒漆・内側を赤漆で塗られた夾紵棺が発見されました。棺の中には、60歳前後の男性の、遺骸が残っており、さらにガラス玉を編んで作った玉枕のほか、錦を身にまとい、胸から頭にかけて冠の刺繍である金の糸が散らばっていたことが確かめられています。

太田茶臼山古墳（継体天皇陵）

次に、室町時代の後半には茨木城が築かれ、城下町として賑わい、京都・丹波と大坂を結ぶ交通の要衝として栄えてきました。特に、江戸時代には西国街道の宿駅として、参勤交代時の西国大名や公家などが宿泊・休憩に利用した**郡山宿本陣**があります。ここは、毎年五色の花を咲かせた椿の木があったことから、椿の本陣とも呼ばれています。

また、本市北部の山間部はキリシタン大名高山右近が治めていた影響のため、江戸時代でも密かにキリスト教を信仰する人が住む**隠れキリシタンの里**がありました。

大正時代、千提寺地区が隠れキリシタンの里であることが判明し、それをきっかけに付近の多くの家から隠れキリシタン関係の遺物が発見されました。有名なものとしては、歴史教科書に必ずといってもいいくらい掲載されている重要文化財の**聖フランシスコ・ザビエル画像**です。これは、他人にその存在を明かさないだけでなく、家人も箱を開くことはタブーとされていた「あけずの櫃」と呼ばれる箱に、他のキリシタン信仰に関係する品とともに秘蔵されていました。現在は神戸市立博物館で所蔵されています。この他マリア十五玄義図やキリスト磔刑像をはじめとする遺物の一部は、市立キリシタン遺物史料館で展示されています。当館に展示している隠れキリシタンと関係のあった家の方も多いため、日によれば受付をしている方から興味深いお話を聞くことができるかもしれません。

マリア十五玄義図

日本史を語るには茨木市は欠かせませんね。
料理に関係の深い寺があると聞いたのですが。

西国三十三箇所第22番札所の**総持寺**のことです。

この寺は平安時代に藤原山蔭により創建されました。寺に残る絵巻によれば、父の高房が川を下っている途中、漁師に捕えられた大亀を助けました。一方、継母のたくらみにより山蔭は川に落とされ行方がわからなくなります。高房は嘆き悲しみ、観世音菩薩に助けを乞います。すると、命を救った大亀が元気な山蔭を乗せて現れました。

高房は感謝し、観世音菩薩像と寺を造ることにしましたが、菩薩像を造る香木が手に入らぬまま死んでしまいます。その後、山蔭が香木を手に入れ、父の遺志を継ぎます。

山蔭は童子に観音菩薩を彫るように命じますが、童子は「仏様を彫刻する千日間は誰も仏舎に入らぬこと。山蔭が私の食事を作ること」と申し出ました。

これに従い山蔭自ら毎日違った料理を作ります。千日目の早朝、「長谷の観音様はどちらに」と声が聞こえると、「行基菩薩よ、今帰るところよ」との答えがあり、童子は空に飛び立ちました。山蔭が仏舎に駆けつけると、千日間の食事を供えられた千手観音が亀の座に立った姿で奉られていました。この

千手観音は総持寺の本尊となっています。

また、この出来事が「山蔭の千日料理」として称えられ、包丁道の祖として尊敬を集め、“山蔭流庖丁式”として現在に伝えられています。

庖丁式は、４月18日に毎年行われています。庖丁式では、烏帽子をかぶり古式ゆかしい装束の料理人が、真魚箸（まなばし）と呼ばれる箸と包丁を用いて食材に直接手を触れずにさばいていきます。食材によってその方法が異なり、鯉は約40種もの切り方があるといわれています。

現在の庖丁式の形態は、室町時代から行われているものとも伝えられています。

山蔭流庖丁式

古式ゆかしい伝統行事はぜひ後世へと引き継がれていってもらいたいです。

次に、茨木市ゆかりの方について教えていただけますか。

本市ゆかりの方といえば、昭和43年日本人初のノーベル文学賞受賞者であり、本市の名誉市民第１号である**川端康成**さんです。

幼くして両親と死別した康成さんは、本市西部の宿久庄の祖父母に引き取られ、15歳で祖父が亡くなるまで暮らしました。読書好きで、創作もしていた康成さんは、旧制茨木中学校（現府立茨木高等学校）中学２年生の頃には作家になることを決意して、中学卒業後は上京、文学ひとすじの道を歩みました。『伊豆の踊り子』『雪国』『山の音』『古都』など著し、今なお世界中で読まれています。本市は、康成さんの業績を讃え、誇りとして茨木市名誉市民の称号を贈るとともに、**市立川端康成文学館**を開館し、原稿・書簡・著書約400点の展示と彼の生涯や作品を紹介しています。

また、文学館の前の道は川端通りと称して、この通り沿いは、**元茨木川緑地**として整備され、大阪みどりの百選に選ばれています。緑豊かな通りを散策しながら、川端文学に思いを寄せ文学館を訪れてみてはいかがでしょうか。

市立川端康成文学館

茨木市は歴史だけでなく文化も日本を代表するまちですね。

これからは、現在から将来に向けた取組について教えていただけますか。まずは行財政改革についてお願いします。

本市は、過去に一度、財政再建団体の指定を受けたことがあります。

昭和23年の市制発足後、市としての形態を整えるため、公共施設の建設を積極的に推進したことが要因でした。その後、財政を立て直すため、企業の積極的な誘致や課税客体の捕捉と徴収率向上に取り組むなど、収入の向上に努める一方で、民間委託をはじめ経費の削減を積極的に推進するなど、再建に向けて懸命に取り組み、昭和41年にようやく、財政再建団体からの脱却を果たしました。

この苦しい体験を踏まえ、他の自治体に先駆け積極的に行政改革に取り組んできた結果、地方財政全体が悪化する傾向の中にあっても、府内では財政状況の良好な団体となっています。

行政改革の取組は、昨年まで、昭和59年１月に策定した「行政改革の推進に関する基本方針」に沿って、若手職員で構成する「行政改革推進プロジェク

トチーム」を設置するなど、積極的に行財政改革に取り組んできました。

しかし、この基本方針策定から20年余りが経過し、地方分権時代の到来や少子高齢化の進展など社会経済情勢が大きく変化していることから、市民との協働や行政経営の視点、さらには職員育成の視点などを踏まえた、自主的・自律的な新たな行財政改革の指針の策定が必要と考え、今後の行財政改革推進の基本方向を定めるものとして、平成18年５月に、新たな「行財政改革指針」を策定しました。

この策定にあたっては、公募市民や学識経験者で構成される「行財政改革指針策定諮問会議」での審議やパブリックコメントの実施など、積極的に市民の参加を求めました。

新たな指針の基本理念は、**「市民本位のスリムな行政経営への改革」**です。つまり、限られた経営資源（人・物・金・情報）をフル活用し、市民との協働のもと、市民の目線に立ち、効果的な施策を選択することで、市民サービスと市民満足度の向上を最大目標とする行政経営の実現を目指します。

なお、行財政改革指針は、行財政改革の必要性や理念、基本的な方向性を示したものであり、この指針の趣旨に沿って計画的に行財政改革を推進するため、行財政改革推進プランを策定しています。ここで可能な限り目標の数値化を行い、それぞれの改革の目標や実施時期など具体的事項を明確にして、積極的かつ着実に行財政改革を推進しています。

過去の苦い経験を忘れず、行財政改革を進めておられますね。

次に、まちづくりについて教えていただけますか。

まちづくりといえば、現在、建設がすすめられている新しいまち、**彩都（国際文化公園都市）**があります。

彩都は、本市北部から箕面市東部にかけての丘陵地に位置し、西部、中部、東部の３つの地区からなっています。都心部から近いという好条件を備え、大阪モノレール彩都線が今年３月19日に阪大病院前駅から彩都西駅まで延伸開業しました。今後、中部地区、東部地区まで延伸する予定です。

平成16年度にまちびらきをしたエリア（西部地区の一部）には、市立彩都西小学校をはじめ、自然林を残した小高い里山のある「あさぎ里山公園」などが整備されています。さらに、平成20年４月の開校に向け、本市15番目の中学校の建設を進めています。

また、彩都のシンボルゾーンである西部地区のライフサイエンスの研究開発拠点**ライフサイエンスパーク**は構造改革特区である**バイオメディカル・クラスター創成特区に指定**されています。ここでは、生命科学の基礎研究を行う独立行政法人医薬基盤研究所や彩都バイオインキュベーターなどが研究活動を開始しています。

彩都は自然と都市が調和した緑豊かなまちづくり、21世紀にふさわしい魅力と活力のあるまちづくり、良好な住宅形成地とあわせて、国際交流、学術文化、研究開発という特色ある未来機能を組み込んだ複合都市の形成をめざして、計画的に事業が進められ、周辺地域はもとより市域の活性化と大阪の発展に寄与することが期待されています。

彩都（国際文化公園都市）

次に、今年６月、本市のまちづくりの基本的な方針となる**茨木市都市計画マスタープラン**を策定しました。平成16年から、多くの市民の参加により、暮らしの視点からまちづくりを考える**市民まちづくり会議**を開催し、そこから提案されたまちづくりビジョン（案）を受け、都市計画マスタープラン策定委員会を中心に検討を進めてきました。

このマスタープランの策定にあたっては、多くの市民に参加してもらうことを重点に進めてきまし

た。

市民と行政がまちづくりについてともに学び、考えることで、まちの将来像を共有し、地域レベルでのまちづくりの種をまくことをテーマに取り組みました。そのために、茨木市のよさの再発見・まちづくり資源発掘のための**ええトコ写真**の募集、まちづくりについて様々な視点から学習する場として**まちづくり寺子屋などの市民参加プログラムを実施しました。**

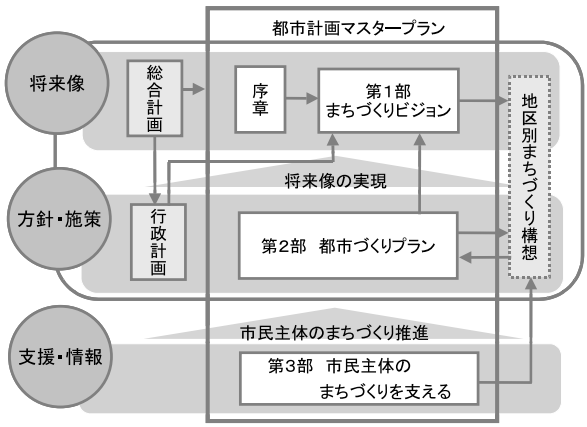
これらの取組を重ね策定した、マスタープランは３部構成になっています。

第１部では、市民の暮らしの視点から総合的にまちづくりを捉えた、本市の『まちづくりの基本方針』を『**まちづくりビジョン**』として整理しました。

第２部では、その実現に向け主に都市計画分野を中心とした施策展開の方針を整理したものが『**都市づくりプラン**』です。市民が描くまちの将来像を実現していくために必要な10のテーマを設け、総合的な施策展開を行うようにまとめています。ここでは、行政が行う計画だけでなく、市民や事業者に向けたガイドラインや、市民が進めるまちづくりの支援の考え方も記載するなど、まちづくりに関係する主体の役割を意識して整理しています。

第３部では、各地区で魅力的なまちづくり活動が展開されるために、市としてどのような支援をしていく際の役割を『**市民主体のまちづくりを支える**』としてまとめています。

マスタープランの構成図



最後に、『**まちづくりの行動規範**』を盛り込み、市民・事業者・行政がまちづくりに取り組むうえでの考え方をまとめました。

また、市民がまちづくりに気軽に活用できるように、取組事例や進め方のヒントをまとめた『**まちづくり役立ち帳**』を別冊で作成しています。

今後は新しいマスタープランをもっと知ってもらうために、地域へ出かけてのポスターセッションや、今回の取組の一つである「ええトコ写真」を活用した写真展を行うなど、地区別のまちづくりへのきっかけ作りを行い、まちづくりビジョンや都市づくりプランを踏まえた『**地区別まちづくり構想**』の検討が地域住民により進むことを目指しています。

マスタープラン作成に参加した多くの市民がまちづくり活動に引き続き参加され、市民主体のまちづくりが進むよう取り組んで行きます。

市民の思いの詰まったマスタープランの実現に向けて、市民と行政が一体となって取り組まれ、地域の特性を活かしたまちとなることを期待します。今年度の新たな取組を教えていただけますか。

近年、企業の経営合理化、市場のグローバル化などに伴い、本市においても、製造業をはじめ市内企業の市外への流出の動きがあります。

こうした背景を踏まえ、市内企業の事業活動を支援し、市外への流出を抑制するとともに、地域の活性化を図るため、企業立地奨励金制度の対象を拡充するなど、産業振興に対する諸施策を積極的に推進しています。

先のマスタープランの作成時ように市民の声を聞く機会は多くあるのですが、市内企業の声をより多く聞き、支援することを目的に、本年４月、企画調整課内に専属の企業立地支援チームを設置しました。このチームの職員が企業への訪問活動などを行い、直接企業の声を聞き、企業が行政に求める施策や情報を把握し、ニーズに応じた事業活動の支援と企業立地促進施策の充実を図っていきます。

また、名神高速・大阪中央環状線などの幹線道路の集中や、電車等を使えば新幹線・空港まで乗り換えなしで行ける抜群の交通アクセスを有している本市の立地特性などを積極的に情報発信するととも

に、企業立地奨励金制度などを活用し、企業誘致を進めていきます。

なお、この取組を**「企業立地（事業活動）支援事業プロジェクト」**として頑張る地方応援プログラムに位置づけ取り組んでいます。

また、消防本部の取組ですが、本年１月にＩＳＯ14001の認証を取得しました。消防本部単独での認証取得は関西初・全国で２番目となります。

エコオフィス活動だけでなく、高機能消防総合情報システムを整備し、消防車両の現場到着時間の短縮化を図り被害の軽減に努めるなど、消防の特色を活かした環境配慮活動に取り組んでいます。

その一環として７月１日から、消火栓や防火水槽などの調査時に、大きな前かごに初期消火用の小型消火器を積載した**消防三輪自転車**を全国で初めて導入し、本署と各分署に配置しました。この前かごには、道路等にポイ捨てされたペットボトルや空き缶などの資源ごみを回収することができますので、防火と環境を同時にアピールすることができます。

なお、消防本部に続き、市役所庁舎本館・南館もＩＳＯ14001の認証取得を目指します。

消防三輪自転車

地域の特性を活かした取組や先進的な取組をされていますね。

話は変わりますが、いよいよ、来年は市制施行60周年ですね。記念行事等を予定されていますか。

本市は、来年１月に市制施行60周年を迎えます。

年明けから様々な記念行事・事業等の開催を予定しています。

本年、その第１弾として、市内の観光名所を紹介するカレンダーを作成し、全戸配布を行います。

６月から７月にかけて、記念行事などで用いるシンボルマークとキャッチフレーズを募集しました。現在、選考会で審査しているところですが、希望と活力のある本市にふさわしい多く作品の応募がありました。入選作品は広報誌に掲載しますので楽しみにお待ちください。

最後に、今後の抱負を聞かせていただけますか。

先程もありましたが、来年は、市制施行60年度の大きな節目の年です。この記念の年に、これまでの歩みを振り返り、さらなる飛躍・発展をめざし、21世紀にふさわしい魅力あるまちづくりに向けて、丘陵地では、未来機能が組み込まれた彩都の建設や安威川ダム、新名神高速道路建設のビックプロジェクト実現に取り組みながら**『希望と活力に満ちた文化のまち』**を目指していきます。

また、当面の重要課題である「子育ての支援など少子化対策」、「学校施設の充実など教育対策」、「ごみの減量化など環境対策」、「耐震化の推進など防災対策」など事業を着実に実行することにより、誰もが住んでよかった、そして住みつづけたいと感じることのできるまちづくりに取り組んで行きたいと思います。

希望と活力に満ちた文化の都市として、市制施行60周年を契機に、さらに発展されることを期待しております。

本日は、お忙しい中、ありがとうございました。